

「はけ」の自然舞台に

文人の 武蔵野

日本には、「ハケ」と呼ばれる地形があります。「ハケ」という日本語は、北海道、東北、関東、九州に散在する古語と考えられており、武蔵野でもその古語が方言として残っています。これまで「崖」「涯」「端」「八景」など、いろいろな漢字が当てはめられてきましたが、大岡昇平の

大岡昇平 ⑥



小金井市の「はけの小路」

「武蔵野夫人」では次のように、「峡」を当てています。「どろろり『はけ』はずな

わち、『峡』にほかならず、(中略)道に流れ出る水を漣(なみ)って斜面深く食い込んだ、一つの窪地を指すものらしい。」

「武蔵野夫人」では、「はけ」とカッコ付きのひらがなで表記しています。「はけ」は、全編にわたって何度も登場する重要な舞台装置です。

作中では「土地の人はなぜそこが『はけ』と呼ばれるかわからない」とし、「斜面に深く食い込んだ『はけ』の窪地は鳥の通り道であった。四季の鳥があたりより一段低い樹々の梢を鳴らして、武蔵野と多摩の流域の間を往来した」と説明し、人間と人間の歴史のためだけにある場所

はないことを示しています。その上で「『はけ』の窪地は鳥や蝶の通り路であるとともに、人間の道でもあった」として、「金と食物に疲れた都会の人たち」が訪れる場所とも記しています。

鳥や蝶のための場所があり、それから人間の暮らしがある。湧水があり、路があり、樗(かし)があり、井戸があり、富士が見える。それが「はけ」のある場所の風景です。「『はけ』は遠い舞台面のように思われる。古い武蔵野の静かな樹と家の間に、人物が影絵のように動いているだけである」とも描かれます。

「彼は自分の『はけ』の自然に対する愛を道子と傾(かたむ)きたいと思った」とあるように、「はけ」を愛する「勉」は、「『はけ』の自然に対する愛」を通じて道子と強いつながりをもとうとします。

「武蔵野夫人」の武蔵野は「はけ」のある場所でした。「はけ」のある場所としての武蔵野が小金井に見いだされたことにより「武蔵野夫人」が生まれたと言えそうです。(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)



過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。